

日本地球惑星科学連合 25 周年記念式典 挨拶

ご紹介いただきました日本学術会議会長の 大西隆 です。

日本地球惑星科学連合の設立 25 周年記念式典にお招きいただいたことにお礼を申し上げ、お祝いの言葉を申し上げます。

日本学術会議には、分野別委員会と称して、各学術分野の発展を促すとともに、それぞれの分野の科学的知見に基づいた社会への貢献を果たすために設けられた 30 の委員会があります。その一つが地球惑星科学委員会で、本日 25 周年を迎えた地球惑星科学連合と密接な連携を保ちながら、活動を行ってきたと承知しています。その意味では、地球惑星科学の分野では、関係学会と日本学術会議が、それぞれの立場に立ちながら緊密な関係を有しているモデルケースです。そのように申し上げるのは、2005 年の日本学術会議法改正によって、コ・オペレーション制度が導入され、現役のメンバーが次世代のメンバーを選考するようになっていることに関連します。この制度は、過去の制度の持つ問題点を改善するべく導入されたので、多くのメリットを含んでいるのですが、一方で、科学者の母体である学協会と日本学術会議との関係が希薄になりがちという危険性を内包していると指摘されているのも事実です。この懸念を払拭するために、私も機会を捉えて、学協会との連携を緊密にするよう会員の皆様にお願ひし、共同でイベントを開催することを奨励してきました。

日本地球惑星科学連合と日本学術会議地球惑星科学委員会の関係は、そうした観点から一つのモデルケースであり、25 年前に既にこうした仕組みを確立された貴連合の先駆者の卓見に改めて敬意を表するものです。

地球惑星科学は、そのネーミングが、自然科学に関心のある人々の心に刺激を与える、とても魅力的な響きを持っています。改めて、その包含するところを伺うと、自然を理解することと共に、自然災害及び地球温暖化などといった地球に存在する社会の安全安心に関わる問題を理解することを含むとのこと。その意味では、地球とは何かという、いわば人類の永遠の関心に応えようとする領域であるとともに、災害に繋がるハザードのメカニズムや、自然ハザードと人間活動との関係を解明する社会的関心の高い領域を含んでいる幅の広い学術分野であると理解しました。私自身は都市工学の研究者ですが、その中にも都市防災という分野があり、異常な自然現象が都市の物的、社会的構成にどのような影響を与えるか、影響を最小限に食い止めるにはどうしたらいいかを研究している仲間がいます。彼らの研究分野が、地球惑星科学の研究領域の一部と深く関わるものであると認識しました。

もう一つ、地球惑星科学連合と日本学術会議との関係を考えると、国際関係に行き当たります。日本学術会議は 1949 年に設立された戦後生まれの組織です。しかし、その淵源は

1879年に設立された東京学士会院や、1920年に設立された学術研究会議にあるとされます。後者は、前者すなわち東京学士会院の後継組織である帝国学士院の建議によって設けられた組織で、特に国際交流に熱心に取り組んだのです。当時の国際組織は、国際学術研究組織、あるいは諸学術連合であり、それらの中には、皆様が現在も深く関わる国際測地学及び地球物理学連合= I U G Gや国際地理学連合=IGU が含まれていました。現在では、日本学術会議地球惑星科学委員会にある国際対応分科会は、日本学術会議が公式に関係する国際組織のうちの約3分の1と関係があるということなので、地球惑星科学の分野が日本の学術の国際交流において極めて重要な位置を占めてきたことが分かります。

さて、歴史を振り返るとともに、未来を考えることも重要です。日本学術会議では現在、**Future Earth** という名前と呼ばれる新しい国際共同研究の枠組みにおいて中心的な役割を担おうとしています。ご承知のように、**Future Earth** は、地球が持続可能な存在であるために、種々の地球観測を行うとともに、人間活動が地球環境に有意な影響を与えることがあることを理解して、人間活動の抑制や方向付けを行うべきかについても考察し、必要な措置を講じることを働きかけようというものです。ICSU、社会科学の国際組織であるISSC、国連大学を含む国連機関、科学研究助成機関の国際組織等が推進し、現在国際事務局の公募が終了し、選考が行われているところです。日本学術会議は、これまで科学委員会、社会連携委員会へ日本人メンバーを推薦するとともに、今回の国際事務局にも、それを共同で担うべく応募したところです。**Future Earth** のアイデアには、地球惑星科学連合の活動と重なることが多いことは皆様もよくご承知のことと存じます。また、既に始まっている日本学術会議におけるこの分野の活動の中心に、皆さんのお仲間がいらっしゃることも承知しており、感謝しています。**Future Earth** では、地球の問題を身近に考える研究者や人々が、より裾野を広げて存在していくことが重要となると考えています。敢えて言えば、これまで、地球という自然的な広がりを意識しなくても済んでいた学術分野においても、地球規模の問題把握がなされ、地球規模の解決策が論じられるような広がりを作り出すことが大事なのではないかと考えています。その意味で、地球惑星科学連合のこれからの活動に期待がかかる点が多いのです。

少し生々しい話を申し上げて、締めくくりたいと存じます。最近、私は総合科学技術会議の議員として、国の新しい研究プログラムであるSIP（戦略的イノベーション創造プログラム）やImPACT（革新的研究開発推進プログラム）の枠組み作りや、プログラムをリードしていく方々の選考に関わっています。これらの研究プログラムが出口指向、つまり、研究成果が起こすイノベーションへの期待が大きいことはご承知と思います。確かに、国民の税金を使って行う研究開発が国民の期待する成果を生み出すものでなければならぬことは当然です。その上で、こうしたイノベーション指向の研究開発を含みこんだ基礎から応用までの研究開発プログラムをより総合的に提起して、研究者、あるいはその卵が持

つ好奇心に始まって、如何にして世界の人を幸福にするような技術や社会システムの改善にまで行き着くのか、その全体像を示すことで、必要な場面にバランスよく研究費が投じられる仕組みを作っていくことが重要ではないかと思います。日本学術会議でも今後こうしたテーマでの議論を起こして、我が国の科学研究を、短期的にも成果をあげ、長期的も持続的な成果を保証するものとするべく提言していきたいと考えています。

まさに、身近な環境問題から宇宙までを対象とした地球惑星科学連合に集う皆さんがこうした議論の中心になることには大いに意義があると期待します。

最後に、本日の 25 周年を改めてお祝い申し上げ、日本学術会議を代表しての私の挨拶いたします。おめでとうございます。

2014 年 5 月 1 日

日本学術会議会長 大西隆